

ISSN: 2189-793X

Amami Station, International Center for Island Studies, Kagoshima University

とうしよけんぶんしつ
島嶼研分室だより

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

No. 19

2024年11月

研究員紹介	p2
令和6年度 奄美分室の常駐研究員の紹介	牧 貴大、北之坊 誠也
研究紹介	p3-4
言語消滅危機の観点から島唄継承の未来について考える	原田 敬子
逃げるは恥だが進化する？—海のヤドカリはなぜ陸に上がるのか—	吉川 晟弘
分室活動報告	p5-8
学生島体験！	p9
奄美サンゴ調査物語	朝賀 伸一



令和6年度 奄美分室の常駐研究員の紹介

牧 貴大・北之坊 誠也

(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

奄美大島は豊かな自然と独自の生態系を持つ貴重なフィールドです。鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室では、毎年多くの研究者が島嶼生態系の保全や地域社会との連携を深める活動に取り組んでいます。さらに、令和4年度より開始された鹿児島大学の全学プロジェクト「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地方創生』の革新的融合モデル」の目標達成に向け、陸域の研究を牧特任研究員と水域の研究を北之坊特任研究員が、それぞれ奄美分室の常駐研究員として進めています。以下、2名の常駐研究員の自己紹介となります。

牧 貴大 特任研究員



奄美分室の特任研究員として2年目を迎えました、牧貴大です。昨年度は地元の方々大変お世話になりました。奄美について右も左もわからない私に文化や美味しい居酒屋など多くのことを教えていただきました。特に私の研究対象であるコウモリについて、多くの方からたくさんの情報をいただき、おかげさまで研究も順調に進んでおります。また、調査の関係で森林に入る機会も多くありました。急峻な地形・急変する天候から時には奄美の自然の厳しさも味わいましたが、同時に多様な動植物を観察し、自然の豊かさを直接体験することができました。現在、奄美の森林に生息するコウモリの研究を進めており、どのような森林にどのような種のコウモリが住んでいるかを調査しています。この研究によって、奄美の希少なコウモリ類の生息地など、保全につながるデータが獲得できればと考えています。今年度は、お世話になった皆様に恩

返しができるよう、奄美の自然を守るための基礎となる研究に一層励んでいく所存です。

北之坊 誠也 特任研究員

2024年5月より、奄美分室に配属されました北之坊誠也と申します。これまでの経歴を簡単にご紹介させていただきますと、私は琉球大学にてサンゴの生殖に関



する研究で学位を取得し、その後、筑波大学下田臨海実験センターの常勤研究員として、サンゴの白化メカニズムの研究に従事しておりました。これらの経験をもとに、今後は奄美群島を中心としたサンゴ礁生態系において、遺伝的多様性や繁殖戦略の解明に取り組んでいきます。加えて、サンゴと褐虫藻の共生メカニズムの解明にも力を入れており、これによって気候変動がサンゴ-褐虫藻の共生関係に与える影響をより深く理解し、サンゴ礁の将来を見据えた新しい視点での保全対策の構築を目指しています。さらに、地域社会との連携も大切にし、地元の小中高生を対象とした環境教育プログラムにも積極的に取り組んでいく予定です。地域の皆様と共に、奄美大島に生息する多様な生物の魅力を次世代へ伝えていければと考えております。奄美群島の皆様には、今後とも温かいご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。魅力あふれる奄美大島のさらなる発展に向けて、教育・研究の両面から力を尽くしてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

薩南諸島における研究の紹介①

言語消滅危機の観点から島唄継承の未来について考える

原田 敬子（東京音楽大学・鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

奄美群島が初めて直面している言語消滅危機。その言語で歌い継がれてきた「島唄」と呼ばれる民謡を追うことで、奄美群島（特に喜界島と奄美大島）の精神文化をあぶり出せるのではないかと、という仮説のもと、6歳～90代までの幅広い世代のうたい手に加えて、それを支える人々に、年に1～3回の頻度で「対話によるヒアリング」を行い、映像や音声に記録しています。そもそもの発端は「鹿児島伝統の薩摩琵琶」の継承危機を知ったことでした（2011年）。この薩摩琵琶は、上級武士の「精神修養の道具」と考えられており、私の興味は「では民衆はどんな音楽を楽しんでいたのだろうか？」でした。そこからゴッタン（全体が木製の三味線）→三線に辿り着き、沖縄エリアと与論島でヒアリングを開始。これをきっかけに奄美群島を選んだ理由の一つは「楽器や音楽に政治を持ち込まない地域だから」です。沖縄では三線、鹿児島本土では薩摩琵琶が最も高貴と考えられてきました。

奄美群島は、琉球や日本のような国の機能を持たなかったからか、或いは音楽の本質（その存在自体が多様性の讃美であり、人間の平等性を象徴していると私は考えます）を

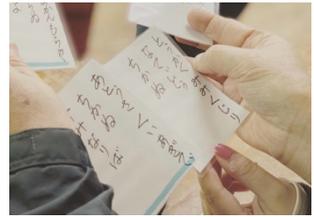


三線の構造を学ぶ
（丸喜三線工房 '17喜界町）

本能的に分かっていたからでしょうか。さて、島唄の特徴については、たった5音（稀に6音）で出来ていて、数々の名曲は詠み人知らずで誰が作ったか不明。その圧倒的な旋律のヴァリエーションの豊かさ、独特の唱法（裏声、節回しなど固有の音色嗜好を持つ）は際立っていて聴く楽しみが尽きません。しかし今の70代くらいから若い人々にとっては、日常的に使わない、つまり”身体化されていない言語”の唄で外国語の歌のようだからか、言葉のニュアンスはどうし

ても弱くなる。それを補填するためか、歌唱技術に走りやすくなる。ウタシャ（心に響く唄をうたう人）ではなくクイシャ（声がいい人）に傾きやすい現状です。言語が分かる世代は若い世代の唄を聴くと「声はいいし上手いけど、全然懐かしくないね」と評します。

こうした現状に注目しつつ、島唄に関係する人々が何らかの取捨選択や変化をさせる時、なぜ、何を根拠にそうするのかを、対話の手法で記録して、後世に



先祖から引き継いだ歌詞の記録
（上嘉鉄集落 '22 喜界町）

伝えていくことに意味があると考えています。そして近い未来に、奄美群島と鹿児島本土をモデルに、地域で育まれてきた音楽の副読本を作成し、教育現場で試用できたらと考えています。地域で育まれてきた音文化は地域の人々の精神文化の表象。子供時代に、先祖から受け継いだ宝「島唄」に触れることで、自然、歴史、民俗などに興味を広げ、地域を理解する機会を得て、その後の人材のリターンや定住も期待しています。個人的には、島唄の存在に深く感銘を受けており、長く歌い継いでほしいと願い、研究を続けていきたいと考えています。



大豆利わらぶえ島唄くらぶ(教室)
を支える方々と('19 奄美市)

薩南諸島における研究の紹介②

逃げるは恥だが進化する？—海のヤドカリはなぜ陸に上がるのか— 吉川 晟弘（日本学術振興会特別研究員 PD 国立科学博物館動物研究部）

私はヤドカリの行動や生態についての研究をしています。奄美大島のような亜熱帯の地域に住む人々は、ヤドカリと聞くと、陸を歩いている「オカヤドカリ」を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。ところが実際には、陸の上で暮らすヤドカリは「オカヤドカリ科」のグループのみ。それ以外のほぼ全てのヤドカリは、海の中で暮らしています。



上陸するサンゴヤドカリ属のヤドカリが観察できる大和村の海岸

私は、海の生き物であるヤドカリが「どのように陸上に進出してきたのか」を知りたいと思い、奄美大島で調査を行っています。この島では「スベスベサンゴヤドカリ」という、オカヤドカリと比較的近縁で、通常は海水中で暮らしながらも、時折陸上にかかるユニークなヤドカリを見ることができます。私は、このヤドカリの「陸に上がる個体」と「陸に上がらない個体」を比べることで、なぜ・どのようにして海の中で暮らすヤドカリが、陸上に進出してきたのかを解明できるのではないかと考えています。

これら 2 つのグループを比較した結果、スベスベサンゴヤドカリは、自身の体のサイズに対して大きな貝殻を背負っている

場合に頻繁に陸に上がっていることがわかりました。この結果を受けて私は、このヤドカリは「良い貝殻」を持っているときに、他の個体に貝殻を奪われないように陸の上に逃げているのではないかと予想しています。



干潮時に上陸してきた
スベスベサンゴヤドカリ（白矢印）
ヤドカリ本体は貝殻の中に
隠れている

オカヤドカリのご先祖さまも、同じような経緯で陸上に進出して来たのでしょうか。それは遠い昔のことであり、今となってはわかりません。ただ、この予想が本当であるならば、私も無駄な戦いから逃げつつも新たな場所で活躍する、そんな人生を送りたいと思いました。



奄美分室で作業する吉川研究員

奄美分室の活動報告（2024年3月～2024年9月）

<セミナー・観察会等>

◎第45回奄美分室で語りましょう「消えゆく言語のうた 奄美島唄の継承～現在と未来」

日時：2024年3月1日（金）ハイブリッド開催

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：原田 敬子（東京音楽大学・鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

スペシャルゲスト：前山 真吾（唄者）

奄美の島唄が文化の象徴として果たす役割とその継承の現状について語られました。高度成長や言語消滅の危機にも負けず、地域での伝承が続けられています。第2部では、継承活動を進める唄者の前山真吾さんを招き、伝統継承への挑戦についての対談を通じ、島唄の未来について話し合われました。



議論を交わす原田教授と唄者・前山



参加者と語り合う高宮教授

◎第46回奄美分室で語りましょう「狩猟採集民のいた島、先史時代の奄美・沖縄諸島」

日時：2024年3月3日（日）ハイブリッド開催

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：高宮 広土（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

奄美・沖縄諸島の先史時代に狩猟採集民が存在し、それが世界的に見ても非常に珍しい文化現象であることが紹介されました。

◎第47回奄美分室で語りましょう「～ハブ～ その魅力から見る奄美」

日時：2024年8月8日（木）ハイブリッド開催

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：星野 蒼一郎（奄美市世界自然遺産課）

奄美大島の生態系の頂点に立つハブの魅力を通じて奄美の豊かな自然が語られました。また、世界自然遺産登録後に設立された奄美市世界自然遺産課の取り組みについて紹介されました。

◎第48回奄美分室で語りましょう「奄美の考古学～旧石器時代から近代へ～」

日時：2024年9月13日（金）ハイブリッド開催

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：川口雅之（鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター）

講演では、奄美群島で2000年以降に行われた発掘調査により明らかになった旧石器時代から近代までの歴史と、その重要な遺跡の文化財指定・保存について紹介されました。これらの成果を通じて、奄美群島の歴史の意義が考察されました。



「語りましょう」で講演を行う川口氏

◎ワークショップ「植物分布モニタリング調査と分布マップの作成」

日時：2024年3月3日（日）

主催：鹿児島大学鹿児島環境学研究会

共催：環境省奄美群島国立公園管理事務所 後援：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター、鹿児島大学総合研究博物館、奄美市、瀬戸内町、龍郷町、大和村

講演：川西 基博（鹿児島大学教育学部）、村上 裕希氏、國宗 弓穂氏、鵜川 信（鹿児島大学農学部）

◎君も植物博士を目指そうー奄美大島龍郷町の道端で植物採集と押し葉標本作りー

日時：2024年7月27日（土）

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

後援：龍郷町教育委員会

講師：鈴木 英治（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）、牧 貴大（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

◎福地川周辺の植物観察会

日時：2024年7月28日（日）

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：鈴木 英治（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）、牧 貴大（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）



龍郷町で植物の説明を行う鈴木教授



押し葉標本作りの様子

◎奄美自然体験プログラム

日時：2024年8月19日（月）～21日（水）

主催：鹿児島大学

講師：川西 基博（鹿児島大学教育学部）、田金 秀一郎（鹿児島大学総合研究博物館）、鈴木 英治（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）、山中 雅之（鹿児島大理工学域理学系）、鶴川 真（鹿児島大学農学部）、西 隆一郎（鹿児島大水産学部）、本村 浩之（鹿児島大総合研究博物館）、小玉 将史（鹿児島大水産学部）、山本 智子（鹿児島大水産学部）、牧 貴大（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）



野生生物観察会講義を行う牧研究員

◎宇検村やけうちっ子環境学習世界自然遺産博士講座

日時：2024年8月31日（土）

主催：宇検村教育委員会

共催：日本自然保護協会、鹿児島大国際島嶼教育研究センター

講師：中野 恵（日本自然保護協会）、北之坊 誠也（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）



海洋生物観察会の様子

◎奄美分室で協力したイベント

● 2024年5月24日（金）

土木学会・水工学委員会・環境水理部会 研究集会

● 2024年7月20日（土）

親子でスクラッチプログラミング教室

主催：鹿児島大学理学部

共催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター、情報基盤センター

講師：小山佳一

● 2024年8月1日（木）

鹿児島大学医歯学総合研究科 離島へき地医療人育成センター 実習の成果発表会

● 2024年8月2日（金）～8月6日（火）

サンゴ礁サイエンスキャンプ

主催：喜界島サンゴ礁研究所

後援：文部科学省、鹿児島県、鹿児島県教育委員会、喜界町、喜界町教育委員会

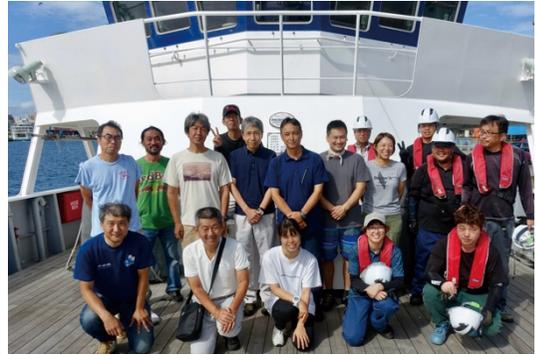
講師：樋口 富彦（東京大学大気海洋研究所）、山崎 敦子（名古屋大学）、Samuel Kahng（琉球大学）、水山 克（名桜大学）、佐野 亘（岡山大学）、Evan James Gowan（熊本大学）、露木 葵唯（琉球大学）、北之坊 誠也（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

● 2024年9月8日（日）～9月11日（水）

水産学部附属練習船南星丸の実習活動に同行調査（諏訪之瀬島およびその周辺海域）



サンゴ礁サイエンスキャンプの様子



諏訪之瀬島調査の集合写真

<奄美分室来訪者数>

のべ 368 名（2024年3月1日～2024年9月30日）

<奄美分室関連報道記事（2024年3月～9月）>

2024/3/3	南海日日新聞	P9	「島唄継承の調査を報告」
2024/3/11	南海日日新聞	P8	「研究者の活動を体験」
2024/3/21	南海日日新聞	P4	「リントンと大島紬の天然染色研究」
2024/3/24	南海日日新聞	P1	「復帰 70 周年記念シンポ」
2024/4/9	奄美新聞	P8	「ブックレットシリーズに新刊」
2024/4/12	南海日日新聞	P7	「ブックレット 2 冊発行」
2024/5/15	奄美新聞	P9	「研究で「地域貢献を」」
2024/5/18	南海日日新聞	P9	「研究者らがデータ検証」
2024/5/22	南海日日新聞	P1	「連携強化し地域に還元を」
2024/6/5	南海日日新聞	P4	「声の力 唄から、言葉から」
2024/7/10	南海日日新聞	P4	書評「南日本の民謡を追って―久保けんおの仕事」
2024/7/14	奄美新聞	P5	「客員研究員募集」
2024/7/22	南海日日新聞	P8	「親子でゲーム作りに挑戦」

2024/7/22	南海日日新聞	P7	「25年度 客員研究員募集」
2024/7/29	奄美新聞	P8	「外来種も見つかる」
2024/7/29	南海日日新聞	P8	「奄美の植物生態学ぶ」
2024/8/20	奄美新聞	P8	「鹿大研究者と学ぶ」
2024/8/20	南海日日新聞	P9	「奄美の自然、研究者と観察」
2024/9/1	南海日日新聞	P8	「環境学習でサンゴ観察」
2024/9/2	奄美新聞	P8	「サンゴの危機学ぶ」

～学生島体験！ vol. 19～ 「奄美サンゴ調査物語」

朝賀 伸一 （筑波大学生命環境科学研究科生物学学位プログラム博士前期課程一年）

奄美大島の調査で身に付けた力、それは「あきらめない力」だろう。今回は、この調査で生まれた山あり谷あり海ありの物語を振り返りたい。私が奄美大島で調査を行った期間は、6月中旬から下旬だった。目的は、サンゴの幼生（赤ちゃん）を獲得すること。多くのサンゴは、一年に一回、4月から6月にかけて、満月前後の夜に産卵をする。産卵の際サンゴからはバンドルといわれる精子と卵がつまったカプセルのような塊が放出される。私たちは、このバンドルを回収するために、事前にサンゴ群体の一部を採集し、奄美海洋展示館の水槽に入れておく必要があった。しかし、海慣れしていない私にとって、サンゴ群体を採集することは、とてもハードなものであった。事実、初日の調査では、カヤックのうえで船酔いをしてしまい、岸で寝てしまっていたほどである。加えて、泳ぎが上手い共同研究者の北之坊誠也研究員も体調を崩してしまったのである。この時ばかりは、今回の調査では、サンゴの赤ちゃんはおろか、群体すらも採集できないのではないかと冷や汗をかいた。そんな状況を打開してくれたのは、さすが海の男、北之坊研究員だった。年に一度だけの大仕事、ここで屈してはとサンゴを海から採集し陸に上がってきた姿はまさに、海の神ポセイドンそのものだった。私は、そんな先輩の姿から、自然（生き物）を相手に研究することの難しさを感じたとともに、実験サンプルがあることに常に感謝をしようと思うことができた。今、私は赤ちゃんから無事に成長したサンゴポリプとともに研究を進めている。奄美のサンゴを使ってたくさん実験ができることに感謝したい。振り返れば、海の綺麗さ、山の豊かさ、そこから生まれる奄美という文化の恵み（みきは私の大好きだ）のおかげで充実した調査にすることができた。奄美で身に付けた海パンをはき続ける習慣（いつでも海に入れるように）も継続中だ。結びに、奄美の自然の美しさが末永く続くことを願うとともに、それに貢献できる研究をする決意である。



左から 朝賀氏、北之坊研究員、高村主任学芸員
(奄美海洋展示館)

お知らせ

2024年5月、本センターの事務補佐を務めていた生美香子さんが任期満了により、退職いたしました。6月から新たに富元かおりさんが事務補佐として加わりました。

編集後記

奄美での半年の活動を通じ、多くの貴重な経験と学びを得ることができました。この地での出会いと発見に心から感謝しています。
北之坊 誠也

Facebook Instagram X(Twitter)



島嶼研分室だより No. 19

令和6年11月30日発行

鹿児島大学

国際島嶼教育研究センター奄美分室

〒894-0026

鹿児島県奄美市名瀬港町15-1 奄美群島大島
紳会館6階

TEL: 0997-69-4852 FAX: 0997-69-4853

E-MAIL: amamist@cpi.kagoshima-u.ac.jp

<http://cpi.kagoshima->[u.ac.jp/AmamiStation/](http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/AmamiStation/)

表紙写真：野外で産卵するサンゴ

(撮影：2023年5月、高村 洗介)

ISSN: 2189-793X